



理科教育助成被災地復興支援対象校訪問

珠洲市立みさき小学校



珠洲市立みさき小学校は、市の東部、つまり能登半島の最突端の地域にある全校児童32人の学校です。校門の前の道を渡った先には粟津海岸、そして日本海が広がっています。令和6（2024）年1月の能登半島地震では校区内の家屋などの倒壊があり、また津波が学校前まで押し寄せましたが、幸い校舎の被害は軽微でした。

私たちが見学したのは、6年生の7人がのぞむ理科の「植物のからだのはたらき」の授業。「いまから5時間目の理科を始めます」「始めましょう！」のあいさつで始まりました。授業担当の西本健教諭より授業の課題を確かめられると、子どもたちは「植物が空気中に酸素を出しているだろうか」と、大きな声でこたえます。3班に分かれ、透明の袋で覆わ



れたピーマン、コキア、多肉植物の酸素濃度と二酸化炭素濃度を、デジタル気体測定器などの計測器具でそれぞれ測っていきます。「マークがついているほうにカバーをつけて！矢印のとおりにさし込んで！」と一人が説明書きを読むと、もう一人が「オーケー！」と息はぴったり。

授業の後半、子どもたちと西本教諭は理科室から屋外へと向かいます。もうすぐ迎える相撲大会に向けて相撲場で練習をしている1・2年生に「がんばれー」と声かけも。事前に二人の児童が、息を吐いて二酸化炭素をあたえておいた植物のまわりの酸素と二酸化炭素の濃度がどうなったかを測ります。袋のなかにがんばって息を吐いたというのに、二酸化炭素の濃度は大きく減っていました。「がっかり！」と息を吐いていた児童。「がんばったなあ」とクラスメイトがねぎらいます。理科室に戻り、校庭で取っておいた測定器の酸素・二酸化炭素の濃度の値を、さっそく大型液晶テレビに写して測定結果をふりかえります。西本教諭に植物のはたらきについて確認のため聞かれると、子どもたちは「二酸化炭素を取り入れ、酸素を出している」と元気な声でこたえていました。

最後に、子どもたちから私たちに「いろいろなご支援をしてくださりありがとうございました！」とあいさつをしていただきました。

校長の角みのり先生にお話をお聞きしました。



——子どもたちは楽しそうに理科の授業にのぞんでいました。

みんな理科が好きで、学ぶことが好きです。横目で1・2年生の相撲練習を応援していたのも、さすが上級生です。

——能登半島地震が発生してから、学校としてどのようなことに注力されましたか。

現在もそうですが、子どもたち一人ひとりへの心のケアを大事にしてきました。教育委員会や県を通じてカウンセラーの方に来校いただき、長期的に子どもたちに向き合っていたいただいてもいます。

——授業などから、子どもたちは人のためを思う気持ちをもっていると感じました。

なにかをしてもらうのが当たり前ではないという自覚があるのだと思います。震災後、地域の方々が粟津の浜をきれいにしてくださいました。それに対して子どもたちがお礼をしたいと、砂浜で伝統演舞の「南中ソーラン」を披露しました。2025年春に卒業した子たちは「みんなを笑顔にしたい」という気持ちから、「珠洲市スマイルプラン」のロゴをつくってTシャツにプリントし、背中には「笑う門には福きたる」と入れました。この地域で育てられた元来の思いやりのある優しい気質に加えて、震災後さまざまな支援をいただいたことで、そうした気持ちが強くなったのだと考えています。

——発災から1年半のいま、学校としてどのような課題をおもひですか。

相撲大会もそうですが、地域の方々の支えがあってこそ実現できることが多くあります。本当にいろいろなことを助けていただきながらやっています。これから歳月が経つとともに、子どもたちの心身がどうなっていくか注視しながら、地域の方々と共に子どもたちにしっかりと向き合っていければと思います。

——最後に、読者のみなさんにメッセージをお願いできますか。

みなさんに「感謝」の気持ちを伝えたく思います。私どもが見えているところも、見えていないところでも、ご支援・ご協力をたくさんいただいているものと思います。奥能登でがんばろうという子どもたちと共にがんばっていきますので、これからも能登のことを応援してください。

【事業紹介】
理科教育助成被災地復興支援

令和6（2024）年1月に発生した能登半島地震の被災地に対し、日産財団は、学校をはじめとする地域の復興を支援するため緊急資金援助を行いました。石川県珠洲市・輪島市・能登町・穴水町に所在する小中学校全28校を対象に総額2,000万円の助成金を贈り、理科教育をはじめとする学校教育活動の復興に役立てていただいています。